

光明寺だより

第83号

浄土真宗本願寺派

光明寺

〒793-0030 西条市大町550

TEL 0897-53-4583



心に残る詩

そのままに

東京都 内田毅 (51)



悲しいことは
悲しいままに
苦しいことは
苦しいままに
苦しいままに
いつかそれらが
心のなかで
星々のように
輝くことを信じて
いつかそれらが
人生のなかで
星座のように
意味あるもの
なることを願って

産経新聞「朝の詩」より



彼岸会法座

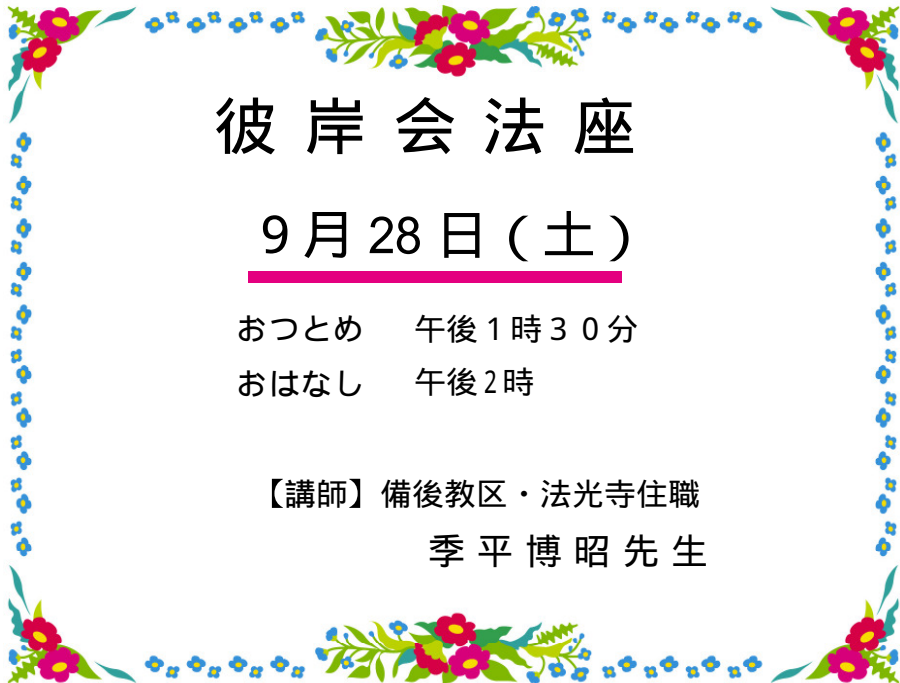
9月28日(土)

おつとめ 午後1時30分

おはなし 午後2時

【講師】備後教区・法光寺住職

季平博昭先生



一口法話

歌人・税所敦子さいしよあつこ



幕末から明治にかけて活躍した女流歌人に税所敦子（さいしよあつこ）さんという方がおられます。

彼女は、文政8年（1825年）京都の宮家付き武士（宮侍）の家に生まれ、幼い頃から歌に親しまれ、20歳で薩摩藩邸（京都）に勤める税所篤之（さいしよあつゆき）氏と結婚されます。

短期で気性の激しい夫によく仕え、近所の人からは、「あんなに無理を言われて、よく我慢しておられますね」と言われたそうですが、そんな時決まって「武士の妻として、何かと足りないところの多い私を人並みの武士の妻にしてやろうとの思いから、言葉も荒くなったり、手も上げられるのでしょ。夫の憤りの強いのは私のことを思っていることです。ですから夫のことは少しも怨んではおりません」と、答えたといひます。

こうして献身的に仕える彼女を、いつしか夫も心から敬愛するようになるのですが、その幸せも長続きせず、彼

女が28歳の時、夫は病で亡くなります。

しかし、悲しみにくれる間もなく、彼女は姑の世話をするため、一人娘（徳子）を連れて、夫の郷里である鹿児島に赴くのです。

鹿児島には姑のほか、篤之と前妻との間にできた2人の娘、さらには5人の子供を連れて弟夫婦が同居しているという大家族でした。

ことに姑は近所の人から「鬼婆」と、陰口されるほどの気性の荒い人で、敦子に対しては事毎に意地悪く当たるのです。



しかし彼女はそれをじっと辛抱するばかりか、「まだ自分のお世話が行き届かないからだ」、「自分に足りないところがあ

るからだ」と、自らに言い聞かせ、姑に仕えるのです。
酒好きな姑の食事は彼女自ら調理をし、また毎夜手洗いに行く姑のため、一夜も欠かさずローソクを持って案内するなど、心を尽くして、姑に仕えます。

当時の鹿児島は、よそ者を嫌う気風が強いところでしたが、孝養を尽くす彼女の姿に人々は皆、これを賞賛して止みませんでした。

そんなある日のことです。

外出先でどうへそを曲げたのか、憚然とした面持ちで家に帰った姑は、彼女を呼び寄せ次のように言うのです。

「あんたは歌を作るのが上手いそうじゃな。今、この婆の前で一つ歌を作ってみせてくれぬか」

「はい、いかような歌を作りますので」と、彼女は素直に応じました。

「それはな、この婆は、世間で鬼婆と言いますじゃ。それで、その鬼婆の意地の悪い所を正直に歌に読んでください」

敦子は驚いて、「まあ、とんでもない。」と言って、しばらく熟考した後、次のような歌を短冊にしたためるのです。

仏にもまさる心を知らずして
鬼婆なりと人の言ふらん

短冊を手に取り、しばらく無言で見ていた姑は、ついに大粒の涙を流し、「今日まで意地悪のし通しじゃった。それほどまでにねじれきったこのわしに《仏にもまさる》とは……本当にすまなかつた。許しておくれ」と手をついて心から謝まったそうです。

また、歌人である彼女は次のような歌を作り、いつも自らを厳しく律していました。

朝夕のつらきつとめはみ仏の

人になれよの恵みなりけり

いかなる苦勞があろうとも、それは「本当の人間になってくれよ」と働きかけてくださるみ仏の「お恵み」ですという歌であります。が、どんな苦難をも恵みと受け止めていくところに、長年仏法に親しんでこられた彼女の素晴らしい智慧が光っています。

その後、彼女の貞節ぶりが、薩摩藩主島津久光侯の耳に入り、登用されて、その息女に仕えて10年、更に島津家から近衛家に嫁入られる際に伴われて近衛家に移って10年、よくその任を果たされます。

さらに明治8年、高崎正風の推挙によって、宮中に入り、明治天皇皇后陛下のお世話係（掌侍）としてお仕えることになるのです。

両陛下の「信任」ことのほか厚く、人々は彼女を明治の紫式部と讃えました。

また、宮内卿・伊藤博文公も、たびたび彼女と打ち合わせをする機会があったようですが、「あれ程えらい婦人に会ったのは初めてだ」と、周りの人に話していたといわれています。

宮中にあつては、外国要人の接待に不由とのことで、50歳を過ぎてフランス語、英語を勉強され、短期間のうちに習得したとのこと。

こうして波乱多き人生を送られた税所敦子さんは明治32年2月、多くの人に惜しまれながら76年の生涯を閉じられました。

清楚で気品があり、文学の素養豊かにしてしかも謙虚である、まさに彼女こそ「千古の婦人の鑑」であります。



テレフォン法話
0897-53-4585

真剣に生きていますか
心配なしに生きていますか
喜びをもって生きていますか
一人ぼっちではないでしょうか

—佐賀真宗伝道懇話会—





第24回仏教定期講演会

10月28日(月)

午後6時30分

ところ 光明寺本堂

演題

「仏様の物差し～畏れなく生きるために～」

【講師】 喝破道場理事長・四恩の里理事長
報四恩精舎住職

野田大燈師

主催 西条仏教青年会 後援 西条仏教会

報恩講

11月28日(木)

おつとめ 午後1時30分

おはなし 午後2時

【講師】大阪教区・西光寺住職

天岸浄圓先生

「総代会」のお知らせ

11月28日 午後3時30分

「報恩講」終了後に開催いたします。

総代さんには改めてご案内いたします

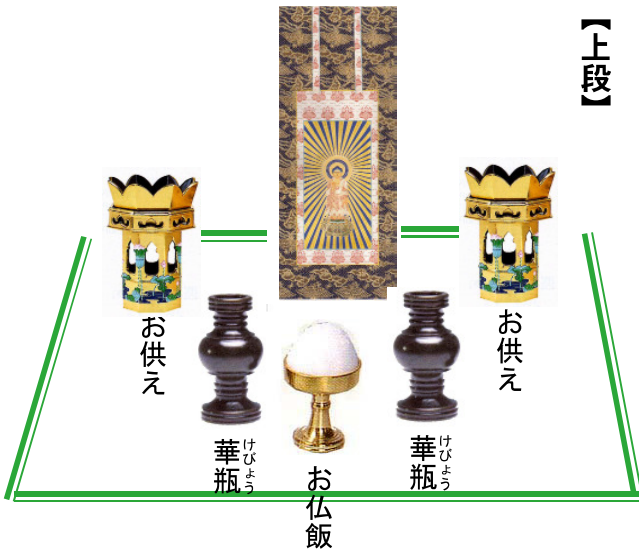
浄土真宗のしきたり

法事のお飾り

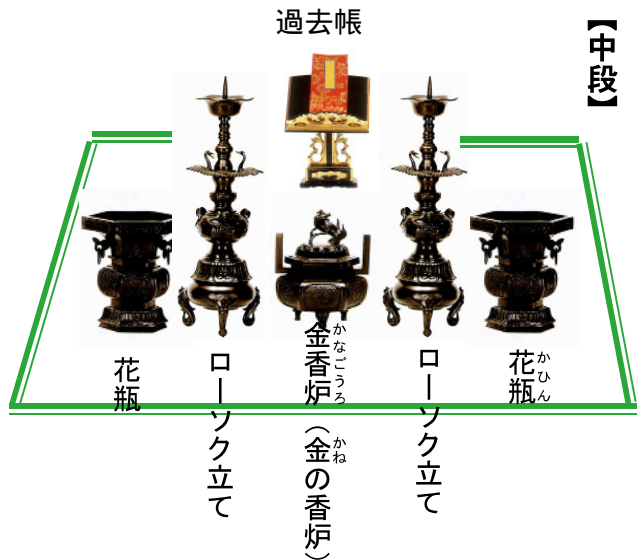
お法事は亡き人を偲びつつ、そのご命日を「縁として、この私がお念仏のみ教えに出遭わせて頂く大切な法事です。出来るだけお仏壇の前でお勤めをしましょう。

法事用の祭壇（莊嚴段しょうごんだん）を設ける時は、「祭壇は臨時のお仏壇」ということを忘れずに、お飾りをして下さい。三段の祭壇の場合のお飾りを図示しますので、参考にして下さい。

【上段】



【中段】



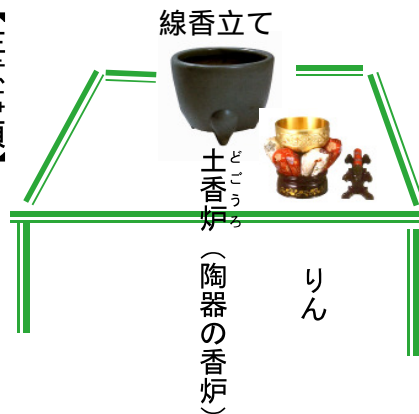
【下段】



上図のような道具がなければ
お盆で代用して下さい

【經机】

祭壇の前に置きます



【注意事項】

- ★華瓶には櫛を入れます
- ★花瓶には生花を飾ります
- ★お線香は寝かします
- ★お茶・お水はしません
- ★お霊供膳はしません
- ★お位牌はまつりません



趣味の広場

俳句を楽しむ(六十二)

森本隆を



七月、八月ととにかく暑い夏でした。二十四時間中エアコン頼みで何とか生き延びたという感じで、いかにも情緒のない猛暑でした。日本人古来の扇子や団扇、風鈴、簾といった、暑さをやり過ごす工夫や智慧ではとうてい通用しませんでしたね。それでもさすがに九月も中旬近くになり、やっと朝夕は秋の気配が漂いはじめ、少し過し易くなりました。稲は実り法師蟬も秋の到来を教えてくれています。

今回は、これから迎える秋という季節を舞台に、私達の日々の暮しが少し昔と比べてどう変わってきているか、どんな物事を失っているか、を季語の世界で考えてみます。

- 馬肥えてかがやき渡る最上川 村山 古郷
- 山川のあをさに洗ふ障子かな 吉岡禅寺洞
- 大寺に障子貼る日の猫子猫 三好 達治
- 草木より濃し千振を引く男 中尾寿美子
- 以上四句、季語はそれぞれ「馬肥ゆる」、「障子洗ふ」、「障子貼る」、「千振引く」です。まず、

私達の日常生活の場面から馬は居なくなり、建ち並ぶ家々もすっきり様子が変わり障子の無い家も普通です。「千振(せんぶり)」に至っては若い人には昔から腹薬として重宝された薬草だなど知っている人もいないでしょう。いずれも

今やほとんど目にしないものであり、実感がありませんね。田畑に目をやると、

稲架の棒突立てさらに深く挿す 土田克巳

からく〜と鳴子の音の空に消え 高浜虚子

鹿垣という空き缶の並べ方 後藤比奈夫

電柱に手を触れてゆく蝗捕り 桂 信子

一句目の「稲架」は、このあたりでは「稲木」とも言い、田に木や竹で組み立てて、刈り取った稲をしばらく天日乾燥してしました。近頃では農家の方がごくまれに自家用米のために組んでいるのを目にする程度です。二、三句めの「鳴子」、「鹿垣」は、実った作物を鳥獣に荒らされないための工夫でした。皮肉な事に最近では猪が田畑にまで現われて被害が増え、徐々に鹿垣(猪垣とも書きます)が復活しているようです。四句めの「蝗」は、私なども子供の時は田の畦を通ると雲の様に蝗が飛んでいました。戦中戦後の物のない時分には食用に捕っていました。今は農薬の普及で蝗そのものをほとんど見なくなりしました。次に自然界でとれる食物の季語では、

紙のごとき松茸碗に旅なれば 中山純子
いちまいの皮の包める熟柿かな

野見山朱鳥
邸内に祀る祖先や椽拾ふ 杉田久女

五、六十年も前には家の近くの里山に入れば子供でも何本かの松茸が取れていました。当り前の季節の食べ物であった松茸が今ももう手の届かぬほど貴重で高価な物となり、「松茸や……」などという句は詠めません。又こ

のころは柿の木の枝先に赤く熟した「熟柿」がぶら下がっていても誰も取りません。三句めの「椽の実」も懐かしい語です。椽の実、通草、山ぶどうなどなど、実りの秋の山野には美味なる自然の実がいろいろありました。今日並べた季語は、今はすっかり身近なものとは言えなくなり、懐しさもあれば少し寂しさも感じる季語ですが、何しろ現実感に乏しく、実用がほとんど出来ないものたちです。生活面での進化の陰で消えてゆくことばが出てくるのは仕方のない事でしょうか。



位職書作品



【字句】 雨聲窓外歇

花気月中来

【意味】 窓の外は雨の音もやみ

花の香りは月光の下にただよう

BOOK 本

『13歳からの仏教』

― 一番わかりやすい浄土真宗入門 ―

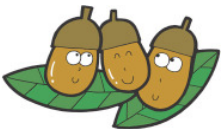


出版社 本願寺出版
編集 龍谷総合学園
定価 12000円 + 税

かわいいイラスト満載でお届けする新しい仏教の入門書！

本書では、お釈迦さまの生い立ちや親鸞聖人の生き方を、カラーイラストとともに、わかりやすく紹介。仏教とは何か、お釈迦さまの教えとは何か、13歳から大人まで、すべての悩める日本人にとって役立つヒントが詰まった一冊。

― 本願寺出版社の説明文より ―



「光明寺だより」をご家族の皆さんで
お読みください

次回発行予定…11月下旬



★バックナンバーのお知らせ
「光明寺だより」1号〜82号
1部…25円(送料120円)
「テレフォン法話集」第一集〜七集
一部…300円(送料120円)



言葉のプレゼント

他人の世話にならず
自分の力だけでやれたことが
一つでもあるか



光明寺のホームページ

南岳山光明寺

または

西条光明寺

検索



★ご門主の「法灯継承式」(お代替わりの法要)が来年6月6日、本山で執り行われることが決まりました。
★『建築巡礼88カ所ガイドブックII』(発行ー公益社団法人日本建築家協会四国支部)に光明寺が掲載されることになりました。
★副住職夫妻の子供の出産予定日は9月18日です。無事出産を願うばかりです。
★仏教定期講演会(西条仏教青年会主催)が10月28日午後6時30分より光明寺本堂にて開催されます。入場無料です。多くの参拝をお待ちしています。

